

米寿のまえがき

高嶺の花を求めて

敗戦後の日本で、西洋に憧れた学生だった私は、ヨーロッパの言語を熱心に学んだ。それは、憧れの異性と一体化したい、という熱情にとらわれた若者のごとくであった。かなわぬ夢とは知りながら、それでもなお対象に近づきたかったのである。できない夢とは知りつつもできるだけ近づきたかった。それは高嶺の花を求めような気持であった。敗戦後のわが国の知識層の間では日本人であることに自己嫌悪を覚える風潮があった。恵まれた環境で育った私ではあったが、それでもその風潮に染まっていたのだろう。当時は日本脱出という意味での国際化がしきりといわれた。自分は日本人として育ったのだから西洋人になり得るはずはない。しかし国際人にはなり得るのではないか。

一九八七年に東大出版会から出した『開国の作法』はその日本と大学の「国際化」を話題にした書

物である。しかしこの二〇一九年の勉強出版から出す『平川祐弘著作集』版におさめる新版では、戦後にもてはやされたその「国際化」とか「国際人」について、天邪鬼らしい感想も添えて、新しい「米寿のまえがき」としたい。近ごろの私は、成熟した大人の国際関係とは何かを考えている。年寄りがいまさら何を言うかとお笑いくださってももちろん結構だが、しかしこの年でも外国語で日本を発信している私には多少の感想を述べる資格があると信じている。

「国際化」という片思い

昭和二十(一九四五)年の敗戦から昭和末年にいたるまでの四十年間、わが国で「国際化」という言葉にはある方向性があった。国際化は軍国日本の狭隘なナショナルなるものを超えるものと受けとめられた。それは戦争中の盲目的な国家主義とは違う善としてプラス評価されたのである。そして具体的に西洋の善い面を採り入れるのが日本の国際化であった。中にはソ連や中国の人民民主主義を採り入

れるのがインターナショナルな正義と思つた人もいたが。

大学関係者についていえば、先進国へ学びに行くことが国際化であつた。敗戦後の日本が貧乏国だったこともあり、米国をはじめとする諸外国へ、先方の資金を頼りに、それにすがつて、学びに行くことが若い学徒の夢だったのである。日本側には自国の学生を送り出す資金すらなかつたのだから、ましてや先進国の教授学生をこちらに招く余裕などにはなかつた。それは個人レベルに即していえば、私たちが日本人の方は外国の教授や学生を自国や自分の家へ招くつもりはおよそなかつたということで、そんな非対称性を当然とする国際関係の認識であつた。しかしそれが敗戦国民の心理でもあつたので、およそ相互性に欠けた、一方通行的な国際化だったのである。国際化とは日本人にとっては西洋先進諸国に学びに行くことであつてその逆ではなかつた。学生が先生に御馳走になることはあつても、貧乏学生が先生を、とくに外国人の先生を自宅にお招きすることなどないように、日本側は国際化とは自分たちが外

国へ行くことと考えており、外国人を自国や自宅に招くこととは考えていなかったのである。

日本が独立を回復した三年後、私はフランス政府の給費留学生試験に通つてパリ大学へ留学したが、敗戦後の日本の文教当局は自国の学生に奨学金を支給して海外へ送ることなどはまだ考えてもいなかった。(ただし文部省で私の為に手続きをしてくれた事務官は本書第一部でとりあげたマレーシアのマハティール青年など戦時下に南方特別留学生の世話をしたと同じ人であつた)。西洋と日本の関係は横ではなく縦につながつていたので、そこには平等の感覚はなく、私たちは文化的にも「甘え」の構造の中で暮らしたのである。

しかしそのような上下関係的な外国文明認識は、日本の学問にも構造的な歪みを刻みこむことになる。

文化直流

この文化的な「甘え」の構造は、敗戦後の日本には露骨に見られたが、実はそれは千数百年に及ぶ島国日本の歴史の特性でもあつた。大陸から文明を撰

取して発展したわが国は、海^が彼^ひに師を求めた。聖徳太子の昔から漢訳仏典を尊び、孔子や孟子を師と仰いだ。明治以来は、西洋の先哲を師と仰いだ。それに対する反動として日本側の自己主張が叫ばれた時期もあった。しかし対米英の戦争に敗れるや、皇国至上主義は影をひそめ、日本人にとって国際化はふたたび美しい言葉となったのである。広く開かれたインターナショナルな心が大切なことは、敗戦後つよく感じられた。そこには左翼のインターナショナルリズムもあればプロレタリアの国際的連帯を叫ぶ声もまじっていた。しかしその国際化とか文化交流とかは外国人も日本の中に受け入れる、という相互性のある国際化ではなかった。島国日本は昔から外国の物は入れても人は入れない。航空輸送が未発達のころは、日本列島を取り囲む海が、おのずから日本を保護するバリアーとなっていたのである。ドーヴァー海峡を泳いで渡る人はいる。しかし対馬海峡は泳いで渡れない。こうして日本は大陸と、その文化は選択的に摂取するが政治的には支配されないと、理想的な semi-detached つかず離れずの関係

を維持してきたのである。

そのような一方通行的な知的交流の実態は、国際文化交流などというにはほど遠かった。そのことは統計的にも証明できる。かつてのわが国は漢籍の入超国であり、明治以来は洋書の入超国であった。和書がアジア大陸や西洋に輸出されることは今日でもきわめて少ない。近ごろになってアニメの本がようやく海外市場に輸出されるようになったが、日本は先進文化を文化直流的に学ぶことを得意とする国だったのである。そのような非対称的な文化関係が続くとすると、日本の学者にも構造的な歪みが刻みこまれることとなる。

日本学者の「からけいじん」

大陸の周辺に位置する日本では、学者や知識人は、外国の権威を後ろ楯^{たた}に日本人に向けて説教する人になりがちになる。道元は鎌倉初期の人で八百年前に宋へ留学した僧だが「この日本国は、海外の遠方なり、人の心至愚なり」と留学帰朝者として高飛車な発言をした（『正法眼蔵』第二十五）。そのように言

うことで門弟の間では海外体験者としての道元の価値は逆に高まった。

徳川時代は鎖国というが、日本で海外崇拜熱がもつとも嵩じた時期である。漢学者は中国を聖人の国と崇めた。荻生徂徠すらも中華思想に感化され「東夷」と自己卑下した。

そんな儒者の中華本位の見方に反撥したのが本居宣長などの国学者で、中国本位で事物を判断するシナ中心主義的なメンタリティーを「漢意」と難じた。万事の善悪是非を北京の判断に基づいて下すその心理は、戦後一時期の外務省チャイナ・スクールや『朝日新聞』の論調にも多少見られた。

しかしそのような海外の知的権威に靡く態度は明治の開国後ではどのように変容したのか。「からごころ」の「から」は「唐」の字をあてるが、からとは本来「外国」の意味である。開国以前も以後も「からごころ」は継続する。そのことにいちはやく気づいた人は夏目漱石である。

「維新前の日本はひたすら支那を模倣して喜」んだが、今の「日本人は又専一に西洋を模倣せんとす

るなり」(『断片』)

こう観察した漱石は「自己本位の立場」に立つべきことを説いた。しかし近代日本では「漢意」に代わって「西意」という「からごころ」が支配的となった。孔子に代りカントが説かれた。新進の教授や評論家が西洋の権威を後ろ楯にして次々と舶来のイズムを説いた。明治は英国、大正はドイツ、戦後はフランスが人気だったが、近頃は本店はどうやら欧州から米国へ移ったようである。

外国思想の日本代理人

私が勤めたころの東大にも外国思想のいわば代理店として名を成した学者は多くいた。大塚久雄はウェーバー、川島武宣はベネディクト、菊地昌典はレーニン、広松渉はマルクス、渡邊守章はフーコー、上野千鶴子はフェミニストなど、西洋を権威としてジャーナリズムで活躍した人も多い。いや、毛沢東や魯迅を権威の後ろ楯として説教した学者もいた。しかしエージェントとして名を成さぬ人の多くも主人持ちの学者であることにさして変わりはなかった

のではあるまいか。そのような人文社会外国語系の教師の中で優れた人の特色は、相手の言語・思想をきちんと理解して紹介することである。しかし日本の知識人としてはたしてそれだけでよいのか、という疑問が残る。

知識人たる者が外国の代理店として翻訳や受け売りをするだけでよいはずがない。交通移動の容易になった昨今である。本国の学者とわれわれが顔を合わせる機会も生じつつある。国際的協力も、思想的連帯の意志表明も容易である。サルトルが来日した時、加藤周一は「ウイ、ウイ、セサ」を連発して、相手の主義主張に相槌を打った。しかし同調することほど容易なことはない。敗戦直後に進駐軍の要員として来日したE・H・ノーマンが『日本政治の封建的背景』を一九四五年秋、日本知識人に提示した時、何人かの日本の若い俊秀が進んでそれに同調した。しかし同調するだけでよいはずがない。それによくよく調べてみると、ノーマンが提示し、後にダラーが流布した『日本政治の封建的背景』なる見方は、そもそも講座派マルクシズムの生硬な日本解釈

でしかなかったのである。

外国思想の日本エージェント

問題は外国側が日本について問題のある誤りを含む発言をした際、その日本代理人を務めることが国際的連帯と言えるのか。外国宣伝の是非を見抜き、問題点を確かめ、相手の間違っている点を伝え、上手に納得させることが知識人の義務ではないのか。なぜきちんと反論できないのか。

私たち日本の学者も外交官も相手の言い分を理解する程度の語学力はあるが、しかし相手の言葉で相手の誤りを正し、説得的に反論できる力が不足している。外国思想の日本代理人の諸氏は、相手の主張に同意は出来ても、反論のような面倒な仕事が残存できない人たちであるらしい。進んでそのような仕事はしない。日本の論壇で名だたるフェミニストであろうとも、米国マグローヒル出版社の高等学校世界史教科書の次の記述には驚くであろう。だが記述の誤りをきちんと反論できる能力はあるのだろうか。

慰安婦。戦争における体験は女性を力づける高貴なものばかりとはかぎらない。日本軍は年齢十四歳から二十歳にいたる二十万人の女を強制的に徴用し、銃剣をつきつけて慰安所と呼ばれる軍隊の女郎屋で無理矢理に働かせた。日本軍は部隊に女たちを「天皇陛下からの贈物」として提供した。女たちは日本の植民地の朝鮮、台湾、満洲やフィリピンその他の東南アジアの日本軍占領地から連れてこられたが、大部分は朝鮮・中国出身者である。

ひとたび日本帝国のプロステーション・サービスの中に組み込まれると、慰安婦は一日に二十人から三十人の男をとらねばならぬ。戦地にいた場合は兵隊と同じ危険に遭遇した。逃げようとした者、また性病に罹った者は日本兵によって殺された。敗戦の際にこの件を隠すために日本兵は多数の慰安婦を虐殺した。

歴史問題やその解釈などについては、事実か否かを確かめ、誤りを正し、実態を証する資料を提示し

て、英語で相手に真実を知らせ、納得させなければならぬ。しかしそれだけの労をとろうとする人が少い。反論するだけの語学力がないという人も多いだろう。またこうした問題にはかわりあいたくない人もいるだろう。さまざまの立場の人もいるに相違ないが、しかしこうした場合、日本人が黙っていてよいものか。私は日本人が自国を批判することは結構なことだと考える。中国で自国を批判すれば漢奸扱いされるかもしれないが、日本で日本を批判しても日奸扱いされることはない。せいぜい日中友好分子と呼ばれる程度である。しかしだからといって、外国人であろうと日本人であろうと、意図的に日本を傷つけるべきではない。日本を傷つける分には虚報も許されるとする人も内外にいるようだが、許すべきではないだろう。

政治的立場

いま右に例示した慰安婦問題の背景となる過去の戦争そのものについてどのような見方があるのか、概観しておきたい。戦後の日本知識人の政治的立場

をおおまかに分類するとおよそ三種になる。

第一は東京裁判の判決の正義を肯定し大東亜戦争の日本の不義を認めるもの（この中には左翼の人も多いが、時流に乗るだけの人も多い。たとえば外務官僚で次官経験者などの中にも歴史の正邪をもつばら外国製の価値基準に求める「脳内白人」というべき者がいる。近年の『朝日新聞』の立場もほぼこれに近い。国内では井上清、海外では中華人民共和国、海外の日本史研究者ではE・H・ノーマンの系統に近い人）。

第二は東京裁判の公正を否定し大東亜戦争における日本側の正義を認めるもの（古くは林房雄から近くは渡部昇一）。

第三は東京裁判の公正を否定するがしかし軍部主導の日本側にも不当性はあるとするもの（竹山道雄、林健太郎）である。なおその際の日本の正当性や不当性についての見方にもさまざまなニュアンスの差はあることに注意せねばならない。

この種の立場があることは日本国内では割方よく知られている。しかし私がここで問題にしたいのは

そのような政治的分類よりもそれを国外へ伝えようとする意志と能力、反論する知識力や言語能力の問題である。一九四七―四八年当時の竹山道雄が、英語で語ることによって、東京裁判のオランダ判事レーリングの目を開かせたことは確かだが、そのような対話が行なわれたのは偶然に近いことだった。

対外的発信装置がなくてもよいのか

日本は日本語が自国以外には通用しないという意味では実は国際社会でマイノリティーに属する国である。言語的にはこの世界で大国とはいえない。しかし産業大国である。その日本は国際的に話題となることがふえつつある。良い意味で話題となるなら結構だが、不当な非難を浴びることもある。

歴史問題に関しては問題点を確かめ、相手の誤りを事実にして証明し、相手の言葉で上手に知らせるがよい。これは政治的立場のいずれを問わず大切なことではあるまいか。相手の言葉で説得的に反論できる力のある発信装置がわが国にも必要なのではないか。私自身は慰安婦問題については秦郁彦氏の

『慰安婦と戦場の性』が実証的なきわめて公平な研究であると考え、その英訳を米国の大手出版社から出すことに智恵を貸した。明治の日本には大切な問題についてロンドンの『タイムズ』などに投稿する日本人がいた。そのような先例を誰か詳しく調べるときではないのか。そしてその種の国際発信用の人材を育成するべきではないのか。

しかし日本からの発信が単に政府の御用機関だけの仕事であつてはいけないだろう。だとすると国際的に通用する「二本足の国士」こそが尊重されるのではあるまいか。それは根無し草の国際人ではあるまい。真の日本の国際人とは何か、という人物像を考え、そのための人材養成につとめるべきではあるまいか。日本が不当に扱われると憤激する正論派は日本に多いが、国内向けの新聞雑誌上で内弁慶が繰返し声をあげても、所詮、井の中の蛙であつて、対外的に反撃効果は薄い。国際的に通じる、きちんと註のついた学術書を世界に向けて発信する。それが日本の汚名をそぐ捷徑しよくけいだろう。その為にはどのよ
うな人材を育成するべきか。

二本足の国士

外国語と母国語を結ぶと、知識がばらばらの点でなく線となる。それに第二外国語が加わると、知識は面となり、遠近感覚がついてくる。さらに加わると、見方が立体的となり、バランスがとれてくる。日本に求められる、日本の第一線に立つ知識人は二つの外国語を学んで三点測量の出来る人であろう。外国語の一つは読み書き話しがきちんとできることが望ましい。研究対象国の文化や専門を学ぶことは大切だが、自分自身の文化の古典の一つに通じると、日本人としての自信がおのずと身につく。日本文化に一本の足を深くおろしていると、判断がおおらかになる。研究の方法は研究対象に応じて自分で造り出すべきで、既製のイズムや方法論に依拠することは好ましくない。

若い日の私は西洋に傾倒したが、同時に自分が日本語人であることも自覚していた。ものを書くなら主要著作は日本語という気持も強かった。しかし必要に応じて外国語でも述べるべきだ、それが高等教育

育を受けた自分の使命の一部だとも思っていた。鷗外がいった「二本足の人」という日本人の理想像に惹かれたのは、そんな二つの欲求が自分の内にあったからだろう。

文化交流の実践としての外国語著述

最初の『開国の作法』を書いた頃の五十代の私は、まだ外国の出版社から書物を出していなかった。ウィルソン・センターで何度目かの講演した後、聴衆にまじっていたプリンストン大学出版局の編集者から「本を出さないか」といわれたときは、この女性は何でそんなに私を買い被るのか、とわずらわしく思ったほどである。当時、東大で比較研究の大学院主任であった私は研究・教育・事務に忙殺され、日本語ですら単行本を出す余力がなかったほどだったからだ。

そんな私は自分が東大定年後、七十代、八十代になり、英国や米国やフランスの出版社から書物を公刊することになろう、とは思ってもいなかった。ハーン関係の英文図書が引き続いて出たのは、

商業的にも採算が取れたからではないか、と推察している。八十七歳になって『神道とは何か What is Shinto? — Japan, a Country of Gods, as Seen by Lafcadio Hearn』という日英両文の小冊子（著作集版『西洋人の神道観』に付録として添える予定になっている）を出したが、英語がまだ楽に書けたことに我ながら驚いている。

前田陽一先生は「外人と同じ土俵で」研究するようにと言われた。学生であった私はそれを、フランス国文学の土俵に上ることと感じ、窮屈に感じた。しかし「同じ土俵」でも、日本育ちの自分の目を持つ以外には自己本位の立場はないという視点を手に入れてからというものは、私は外国語でも気楽に書けるようになったかに感じている。

いま一言いい添えると、子供の時から神棚に向かい柏手かしわでを打った。神社にはお詣りをしている。そんな日本の一知識人である自分が土着の宗教について語るのははたして妙なことだろうか。天皇は神道の大祭司であり、神道は天皇家の宗教であり、日本固有の宗教である。それが海外で誤解されがちなとき、

外国語でそのために語ろうとする人がいないことこそ奇妙なのではあるまいか。

開国の作法の行き着くところの一つは、自己の宗教文化的アイデンティティーについて平明な外国語で他国の人に説明することでもあろうかと感じている。

旧版『開国の作法』を出したころ

しかし当初はそうした精神の内奥の問題とは考えず、外的な文明の作法のように考えていた。

昭和六十二年、満五十六歳当時の著者は、米仏加台の諸大学で延べ三年ほど講義や講演を行なってきた（台湾では日本語で教えてきた）。戦後最初期の留学生として日本がまだ極度に貧しかったころ、すでに六年余を西欧諸国で過した私は、当時の東京大学では例外的に長い外国体験者であった。それで、かつての敗戦国だった日本もいま豊かになりつつある以上、昭和六十年代にはいったわが国は、外国の学者や学生をこちらももつと招くべきだ、と感じ、そのような主張を『開国の作法』に発表したのである。

る。旧著の「まえがき」の冒頭にこう書いた。

佐久間象山は安政元年（一八五四年）『省儉録』に次のように述べた。

余、年二十以後、乃ち匹夫にして一国に繋がることあるを知る。

三十以後、乃ち天下に繋がることあるを知る。

四十以後、乃ち五世界に繋がることあるを知る。

象山ははじめ藩（一国）に対する狭隘な忠誠心を抱いていた。それがやがて統一国家としての日本（天下）、さらには国際社会（五世界）への連帯意識が生じた、というのである。私がこの句を初めて読んだのは大学院生時代、昭和二十年代の後半で、私は戦争中、日本に繋がることあるを知っていたが、五世界に繋がることあるを必ずしも知らなかった者だけに、象山のこの句のダイナミズムに感銘を受けた。「三十にして立ち、四十にして惑はず」の『論語』よりよほど新鮮な知的視野のひろがりを感じた。その後私が象山の「東

洋道徳西洋藝」の標語に興味をひかれ「和魂洋才」の系譜を調べにはいった背景には、そうした「世界大への人間」、鷗外がより正しく定義するところの「二本足の人」への関心があつたからだと思う。

しかし私自身が、三十、四十、五十といつか年経るにつれ、人間の知的成長は象山が巧みに要約してみたほど段階的に進歩するものではない、と思うようになった。いま自分の属する大学にながりに、生れ育つた国につながり、またさらに書物的知識を通じてのみか具体的な交友や仕事を通じて五世界の中の三世界ほどにつながる自分自身を見いだしてはいる。がそれでも時には外国世界が煩わしくなつて母国へ回帰したくなつたりもする。

五十代半ば過ぎの私はそんなだらしないうちも言ひ出し、回帰などという言葉を口にした。周囲の土着派教授に対する配慮もあつてまぜた弱気の姿勢だつたのかもしれない。

母胎回帰はもはやできない

だがそれは単なる弱気ではなくて人間性の自然でもあるので、日本人の多くが年をとるにつれ和食を好むようなものだろう。だが食も性も似たような嗜好であるとして、国際結婚した夫婦がそれぞれ母国への回帰を求め出したら一体どうなるか。それでこんな諧謔かいぎやくを弄ろうしたことがある。フランス語教室で人事が話題になつた際に、

「どうです。フランス人と結婚した方を優先して採用しませんか」

となに食わぬ顔をして提案した。

「なるほど、一案だね」

と相槌を打つ者がいる。そこで私がすかさず、
「しかし離婚したら即刻くわくに辞す」

みんなわつとなつた。それというのも当時のフランス語教室にはフランス人女性と離婚して教え子の日本人女子学生と再婚した同僚がいたからである。

食にも性にも政治にも似たような文化的体質があるらしいとすれば、この先どうすればよいのか。今

のわが国はもはや徳川の平和への母胎^{ほたいかいき}回帰はできない。日本は米國と政略結婚にも似た同盟で結ばれている国なのだ。「まえがき」にもすでに記した。

日本はもはやその国際的環境から切り離して自國だけで生存できる国ではない。となれば国際社會において相応の地位を占めるべき日本とその大學について、やはりなにか考えないわけにはいかない。

それで、世界の中の日本や、その大學について、一九八七年当時としては新しい考えのいくつかを旧著の中で述べたのである。率直に思いのたけを述べましたし、またおだやかに随筆で説きもしたつもりであった。

教養と修養

それでも「鼻持ちならぬ」と陰口をいわれてしまった。特によくなかったといわれた二点をあげる。第一点は、次々と諸外國に招かれた私は、プリンス

トンにいた八カ月の間「食事に呼ばれたことが六十余回」などと具体的数字をあげたことである。北米には大學がその町の文化の中心となって学問的社交が行なわれる名門校がある。彼の地の大學では講演会のあと講師のみならず聴講者もフリーで食事に招かれる慣習があればこそ「六十余回」になったので、その事情を明記しなかったために生じた誤解でもあった。十九世紀の末年、当時はまだ無名のアメリカ作家が渡歐して食事に呼ばれた回数を気にしていたことを記憶していたので、私もそんな回数を記したままである。

しかし平川家も実に多くの客人を外地でも日本でも招いた。東大駒場の職場の近くに住んでいたから、担任のクラス学生全員、イタリア語の中級クラス、大学院、訪問教授を平川家は食事に招いた。私自身旧制一高の先生の家に遊びに行き、そこで依子と結ばれる幸福を得た身である。私たちはそれを繰返したのだ。そしてそれをここに記すことで家族への謝意に代える。まだ小学生だった三女が英語のスクラップルで英文科の大学院生を破ったとき、彼が

青ざめたことも覚えている。

私はそんな失礼なことも知ってか知らずか繰返した。その第二の点は、私が「駒場の学風」を強調し、教養主義を主張したことである。渡部昇一氏が責任ある大知識人であったことは著作集版『書物の声 歴史の声』にも述べ、最晩年の私どもが親しかったことはそこに詳しいが、壮年期の氏は私に距離を置いたのみか、「早い時期に人生の出世街道に乗ったような人は修養で苦しむことがなかったから」教養を唱え「修養という言葉を嫌がる傾きがある」として、こともあろうに実例として私の名をあげた。確かに私は大正教養主義の伝統に連なる第一高等学校の生徒で、竹山道雄の婿となった。それはその通りで、東大教養学部では教養学科の第一回生で日本で最初の教養学士である。それも事実だが、だからといって、教養のみを重んじ「修養的なことは余計な話だ」と言った覚えはない。

フランスのエリート校の卒業生は著書に *ancien élève de l'Ecole Normale Supérieure* と記す習いがあった。第一次大戦でその学校の卒業生が国に殉じた割

合は士官学校卒業生よりも高かった。そのような実態であるならエリート意識もまた許されることかと考える。その問題を正面切って論じなければならぬ日本にまたさしかかっているのではあるまいか。

構成の異同

旧著から三十年、平成末年の日本の大学院は外人教師も留学生も次々と受入れている。昭和末年の日本と比べると隔世の感がある。それだから私が東大を満六十歳で定年退職した一九九二年に書いた《東大駒場の留学生たち》などの『読売新聞』記事は、もはや新味はないだろう。それでも駒場キャンパスで一九六六年に初めて韓国留学生を受け入れ、比較の大学院が外国人を初めて助手に採用し、博士論文審査を公開に踏切ったりしたことは、やはり記録に残す価値があると思ひ、今回の著作集版に拾うことにした。

旧著と新著の『開国の作法』の異同について、書誌的にも説明させていただく。

二〇二〇年に勉強出版から出るこの全十八巻本

『平川祐弘著作集』版の『開国の作法』は、タイトルこそ同じだが、一九八七年に東京大学出版会から出た二八四頁の随筆集『開国の作法』に比べて、内容が三倍強の九七三頁ほどに膨れている。最初の本と今度の本の構成の異同について述べさせていたただく。

読み返してみると、旧版で提起した開国の作法さほうの問題の多くは、当時も今もやはりそのままのこともある。今回の『開国の作法』は前回より多岐にわたる全十二部からなるが、詳しい出典は「底本」に明記してある。構成の異同はこうである。

旧著『開国の作法』から多くを拾ったが、それ以外の著作からも、また従来書物にまとめてなかった文章からも拾った。その新規加入について説明すると、新たに第一部「人」を設けたのは、やはり人間こそが国際交流にとって決定的に大切だと思われるからである。しかしその人選に、著者が、世間に戦後流布した歴史観とはやや異なる見方をしていることもわかるだろう。その第一部には『東の橘 西のオレンジ』（文藝春秋、一九八一年刊）から三点を拾っ

た。

第二部には「消えてゆく人民中国」だけでなく「甦る中華帝国」についてもふれるべき昨今の時勢である。だが、私はすでに米寿、そろそろ筆を慎むべき年齢である。以前は中国語学習は「定年教授の楽しみ」だったが、作文「忽然寺」を書いたところが私の中国語学習の山だった。中国からポックリ茶を輸入する、しないはともかく、忽然死をとげた、ポックリ行きたい旨は本書のあとがきにも記した。その第二部には『中国エリート学生の日本観』（文藝春秋、一九九七年刊）から、第四部には『日本語は生きのびるか——米中日の文化史的三角関係』（河出書房新社、二〇一〇年刊）から多く拾った。第八部には単行本未収録の随筆も拾った。

第十一部「駒場の学風」は旧師の追憶だが、三十年の間に多くの師友が世を去られ、ために旧著『開国の作法』より厚くなり追憶はふえた。しかしその人々が去り、駒場の地から教養主義は薄れた。前田陽一先生は私の恩師の一人だが、教養学科を創設し、国際主義を奉じ、実践された。『開国の作法』は特

に目をとめてくださった拙著である。なつかしく、有難い。市原豊太先生とともにその思い出は別途刊行予定の自伝に記すつもりなので、ここではそれぞれ一点を掲げるにとどめさせていただいた。

第十二部は当初全三十四巻中に予定されながら、新企画による縮小過程で日の目を見なくなった竹山道雄についての二巻、夏目漱石とマードックにふれた一巻、ダンテ、マッテオ・リッチ、中村正直についての諸巻、また、平川祐弘の時論三巻、さらには当初から予定外だった翻訳篇や外文篇などのために、友人知己が書いてくれた文章を集めた。当初の目論見と違う形での発表となり、恐縮至極である。この場を借りて、心温まるこれらの数々の文章や、また『平川祐弘著作集』刊行に際し「推薦のことは」を寄せられた内外の諸賢に、お礼を申し上げる。

近況の報告

二〇〇五年春に台湾大学から帰国してからは、私にはもはや外国へ長期出張しなくなった。それは直腸を手術したために、不便が生じたためである。福岡

でマンシヨンの十一階から大野城の駅を出て来る若い中国語の先生を待ち受けたのはもう遠い昔のことになってしまった。

海外へ出なくなると、新しい言葉を覚えるどころか前に習った外国語の維持すらも怪しくなる。しかし外国語に向けた力をよそにまわすことができたせいかどうか、七十代から八十代にかけて私は多く執筆もし、書物も次々と出した。英語やフランス語でも出した。近ごろは外国語文章を発表した日本人の最高齢は何歳だろう、などと思っている。しかし肝腎なのは発表するだけでなく内容の質である。また広く読まれることである。多くなくともよい。

まあ、ざっとそんなところが外国語と私との関係だ。人間の寿命は予測がつかないが、私としてはぼつくり行く前にまだなにか一仕事、心に残る一編を残して去りたい。

中国の夢

しかし前にこんな例もあったから気をつけないといけない。周作人は自伝の筆を擱おくに際し「辛亥革

命以来の五十年間に社会情勢は確実に少なからず変わった。これはまことに結構なことである」と述べたが、それは実はたいへんな認識不足で、結構な事ではなかった。自伝の^{あとがき}后序は一九六六年一月三日に書いたが、八十二歳のその年の八月二十日、紅衛兵が周作人の家へ乱入し、殴打され、周作人は生殺し^{なまころ}の惨めな様になり、台所の小屋にいたまま翌年五月没した。

そんな例もあるから、私たちも気を抜いてはいけない。なにしろ貧富の差が世界最大の国が隣にいて、火種を抱えている。それがいつどう暴発するか。大陸中国には遅かれ早かれ易姓革命まがいの騒動が起るのではないか。その際、現在のレジームは崩壊するとして、ポスト共産党時代の中国へはたして無血で移行できるのか。台湾の民主化への移行の先例を尊ぶような大陸となるのか。それとも台湾を併呑することが「中国の夢」となるのか。ナチス・ドイツがオーストリアを併呑したときが point of no return で、第二次大戦はそのとき実質的に始まった。これから先、中国エリート学生たちはそのいずれを選ぶ

ことになるのか。

近ごろ私は中国語新聞をまた購読している。かの国の情勢がどうも穏やかでない。それだから、その雲行きが多少でもわかるかと思ひ、見出しだけでも注意している。習近平が登場した直後、二〇一三年七月十八日に『産経新聞』に執筆した拙稿《笑い事ではなくなった「中国の夢」》を結びに掲げ、ご参考に供したい。いま多少手直ししたが、この文の是非もまた後世の読者のご判断に任せたい。

中国の夢とは何か、米国の夢と比べてみたい。「アメリカン・ドリーム」は世界に知られ『広辞苑』にも「誰にも均等な機会が保証されているアメリカ社会では、人はその才能と努力次第で成功し、社会的・経済的にも限りなく上昇できるとする考え方」とある。そして上に専制君主をいた^だき貴族階級が世襲的に支配する旧大陸ヨーロッパと違い、大統領を国民の投票で選ぶ新大陸アメリカの共和制が讃えられている。研究社『新英和^{大辞典}』にも、American dream は「独立宣言にう

たわれた民主主義の理想と物質的繁栄とを国内から始めて、国外にも及ぼしたいという理想」と出ている。

米占領軍は、善意か自己過信か、そんなアメリカ的生活様式を敗戦国日本にも広めようとした。結構な数の日本人もアメリカを夢み、留学生の何人かは米国に魅了された。学会発表が見事であれば次々と米国の大学から講演依頼の口がかかる。地位も給料も上がる。人民中国の閉塞から脱出して渡米した中国人学生は日本人学生以上にそんな米国の夢を体感し、中国語で「美国」と呼ぶ彼の地で定住した。

だが、人は海外で暮らすうちに祖国が豊かになれば誇りたくもなる。薄給の私でも、一九七八年、日本の高度成長のおかげで、いままで一ドル三六〇円のレートがにわかには円高になるや、東京から送られる給料が毎月のように高くなった。そのときは自分の鼻まで高くなった。ましてや *very important* で知られる尊大な中国人だ。極貧国であった自国が強盛大国となるにつれ、精神的自己

肥大が生じても不思議はない。世界の二大強国ともなれば「米国の夢」に対し「中国の夢」を言い出さずにはいられない。

だが一九四九年以来、秦の始皇帝の再来ともいうべき主席が上で一党専制を行ない、その下で党幹部の子弟が世襲的に支配してきた国に、未来へのどんな夢があるのか。

だが注意せねばならないことは、その夢を声高に語り出したのが、この二〇一三年三月十四日、中華人民共和国主席に選ばれた太子党の習近平であるからだ。三月十七日の講話でこう繰り返した。

「中国の夢を実現しよう。そのためには中国的特色のある社会主義の道を進まねばならぬ。それは改革開放以来三十余年実践してきた偉大な道であるばかりか、中華人民共和国成立以来六十余年、探し求めてきた道である。それはアヘン戦争以来百七十余年の深刻な歴史発展の中から総括して得られた結論であるばかりか、中華民族五千余年の悠久の文明を伝承する中から生まれた道である。歴史的淵源は深厚にして、現実的基礎は広範であ

る。中華民族は非凡な創造力に富む民族であり、偉大な中華文明を建設してきた。この体制に自信をもち、勇気を奮い、前進せねばならない。中国の夢は民族の夢である。中国精神を弘扬させ、愛国主義を以って核心となし、全人民心を一にして中国の夢を実現せねばならない」

改革開放以来、中国は工業、軍事、科学技術などの面で外国からも学び、いまや一面では大国となった。中国人は自信を回復しつつある。だが、政治、社会での現代化に成功しない。前政権はまだしも改革を口にしたが、新政権は改革を望まぬ既得権益層に権力基盤を置いている。権力を銭に換える体質である以上、軍産複合体はいよいよ肥大化するだろう。

それをチェックして党幹部の収賄↓蓄財↓資産の海外移転という構造的腐敗を打破することができるとはとても思えない。そうこうするうちに農村戸籍と都市戸籍の差別撤廃を主張する正義派が社会の底辺の支持を得て抬頭し、革命勢力として現体制をゆるがすかもしれない。習主席は民衆の

不満をそらすためにも「中国の夢」を称揚せざるを得ないのだ。では具体的にチャイナ・ドリームとは何なのか。

習近平が言い出す前から劉明福の『中国夢』（中国友誼出版、二〇一〇年）が過去三年来、大陸ではよく売れた。曰く、ポスト・アメリカ時代、中国は世界一をめざす。世界に中国時代を招来させるのがチャイナ・ドリームである。二十一世紀、米中は対立するが、世界が求めるのは中国の王道であつて米国の覇道ではない。中国は「歴史清白、道徳高尚」植民地支配をしたこともなく世界大國中唯一の「没有原罪的国家」である。ゆえに天下に王道を広める資格がある。その中国には退路はない。米国と戦火を交えぬためにも中国には強大な軍が必要である。云々。

物騒なのは著者が現役の大佐であることだ。大中華秩序の復活の夢を劉氏は「黄福論」と称する私にいわせれば「黄禍論」だ。何が無原罪なものか。だが中国では自国の悪は一切教えない。それだから無知な民は黄福夢にひたっている。二昔前、

北京でタクシーの純朴な運転手に「あなた方はいい人だから、日本のような悪い国に帰らないで中国に住み着け」と真顔でいわれた。「年老いた母が日本で待っている」といったら、「お母さんもこちらへ連れてこい」といわれた。そのとき私は笑ったが、家内は中国語の先生までがタクシー運転手と真面目に同じ事をいうので、笑えなかったそうである。

こんな自己満悦の教育環境の大国で、こともあろうに習主席が「中国夢」と言い出すに及んで、この自画自賛は笑い事ではなくなった。白昼夢のような中国夢が軍事大国の悪夢と化するのはい体いつか。二〇一三年にこの『産経新聞』「正論」欄で本書にふれたときは、荒唐無稽と思われたせいか日本読者の反響はおよそなかった。よもや習主席が劉明福のチャイナ・ドリームを鼓吹しようとは思わなかったからであろう。だが私はまた『中国夢』を読み返している。

私は『中国夢』をもう一冊求めて保守系の雑誌の

さる編集長に手渡した。こうした習近平思想だか大中華思想だかの分析でも載せるがいいという老婆心からであった。しかしそれを読んで訳して紹介するなどという手間暇かかることは日本のマスコミはあまりしないらしい。それでいてどの雑誌にも、決まりきった面々が、大きな声でわかりきった正論ばかり唱えている。そんな誌面に新鮮なニュースはなく、学術的価値もない。初めに結論ありきの怒れる小父さんたちの記事には新味が欠ける。

そんな精神の老化や頭脳の固陋化を防ぐためにも外国語で頭を訓練することをすすめたい。開国の作法とは相手の言葉をすこしでも習って、その主張を理解する情報感受能力をみがくことではあるまいか。私は戦争の末期、金沢の第四高等学校の時習寮で暮らした。「学ンデ時ニ之ヲ習フ、亦説バシカラズヤ。朋アリ遠方ヨリ来タル、亦楽シカラズヤ」。

そんな聖賢の言葉を私はあらためて有難いものと思う。中国の友人が、当局を気にせず、自由に日本に來遊し、気楽に指導者の悪口が言える日の来ることを切に祈る次第である。

SAMPLE

開国の作法

定年教授の楽しみ	1
米寿のまえがき	3
第一部 人	43
サンソム卿と日本	45
一語の誤解——廣田弘毅の最期	70
南方特別留学生	75
江藤淳氏とアメリカ——いかに日本を外国人に外国語を用いて説明するか	89
「知」を輸出した自己本位の学者	117
日米開戦と原爆投下——封印を解かれた『フーヴァー大統領回顧録』	120
第二部 消えてゆく「人民中国」	149
中国エリート学生の日本観（一九九六年五月）	151
消えた同志（一九九五年十二月）	174

娘と一緒に中国、二人旅……………177

毛沢東のお守り（一九九二年）……………180

プチ・ブル……………183

毛沢東はいまどこにいる……………185

中国エリート青年の毛沢東離れ……………188

「死に至る病」中国の構造的腐敗……………198

「漢奸」がいて「日奸」がない理由……………201

『中国エリート学生の日本観』あとがき抄（一九九七年）……………210

第三部 「世界市民」がはまりやすい陥穽……………221

英国で接した天皇報道（一九八八年十二月）……………223

ムツソリーニ失脚——イタリアのいちばん長い日……………243

歴史の真実を見分ける「眼識」……………268

ソウルの国立博物館……………271

原語主義は無理……………273

過剰忠誠は人間性を殺す……………276

惜しみなき献身……………279

鈴木貫太郎の常識……………280

分別のある人が黙るような国はよくない……………283

日本はダメと言って自分を偉く見せる日本人……………286

「世界市民」がはまりやすい陥穽……………289

日中関係と独仏関係の違いを心得ぬ人たち……………292

第四部 日本語は生きのびるか……………295

米中日の三角関係を文化史的に鳥瞰する——はじめに……………297

日本語の生存空間……………302

英語は標準語？ 日本語は地方語？……………339

留学生の文化史的意味——一國一辺倒を排す……………360

第五部 国際化と日本……………385

どうしたら日本人は外国へ向けて意見を述べることができるか……………387

平和への武器・辞書をつくろう……………411

二冊目の仏和辞書……………429

私の語学遍歴……………433

外国語の力を維持する秘訣……………436

「つながり」の国際感覚……………440

外交官よ、もつと話せ……………448

ライシャワー夫人の日米にまたがる大河伝記……………451

第六部 国際化と大学……………457

「近代的自我」という神話……………459

大学の西洋化、日本化、そして国際化（一九八一年）……………467

主任と外人教師と助手と学生……………469

駒場における外国人教師と外国人学生……………471

東大駒場の留学生たち——最終講義を終えて……………475

学問的社交……………478

私用言論の自由……………485

大学における選択……………485

比較日本文化論の可能性……………489

文化比較における価値判断の基軸とは何か……………491

——日本人にとっての国際性と自己同一性をめぐる諸問題……………491

第七部 外国で考える……………513

インドネシア出張記……………515

「君命」を辱しめず……………520

大西洋の夏休み……………523

アナポリス海軍兵学校……………525

三人の捕虜……………530

誇るべき女性解放?——反面教師としてのアメリカ社会……………537

指導者たる者の妻……………541

トイレの平等……………544

YWCAの思い出……………545

マンゾーニ『いいなづけ』の翻訳……………547

ダンテと日本語訳……………549

「文明の衝突」か「異教との共存」か……………550

第八部 外国で暮らす……………555

外国語と電話……………557

フランス映画と私……………561

黒田清輝のモデル、マリア……………563

ツヴァイクに読みふけたころ……………566

リルケの鷹……………570

第九部

日本をまた考える

- ハイドンのレコード……………573
- コロンプスの卵……………576
- カナダで放送された『草枕』……………578
- 車のない都……………580
- 掟……………581
- ブラドの騎士……………582
- 江戸の家庭、明治の家庭——『埴生の宿』から『ぢいさんばあさん』まで……………591
- 下駄の音……………617
- 松江の洞光寺……………620
- 越前大野……………623
- 世界の中の徳川文化——懐かしい日曜の安らぎ……………624
- 杉田玄白『蘭学事始』……………627
- 明治は甦える……………630
- 岩倉使節団はどのような西洋知識をもって米欧回覧に向ったか……………633
- 深く敬ヒ参ラスル武夫サン！——『広瀬武夫全集』について……………639
- 今村均『回顧録』……………645

内村鑑三 *How I Became a Christian* 648

クワイ川収容所やアロン収容所を越えて 650

女王の手紙 655

明治天皇崩御から百年に思う 657

民族の永生を願う心 660

『開国の作法』あとがき(一九八七年) 662

第十部 語学教師の夢 667

語学教師の夢 669

“タコツボ思想” 脱出の道 671

「反大勢」の読書 674

私の「本」整理術 678

『マッテオ・リッチ伝』の思い出 681

作品としての歴史著述 682

第十一部 駒場の学風 687

竹山先生のこと——身内からの追憶 689

消え行く一高 696

東京裁判史観の是非——レーリング判事の回想に寄せて	698
菊池榮一先生	701
富士川英郎先生	708
氷上英廣先生のこと	711
小松清先生と川口篤先生	719
市原豊太先生のこと	722
前田陽一先生のこと	725
寺田透先生	728
加藤吉彌の思い出	730
朱牟田夏雄先生	740
島田謹二先生	742
複眼の学者詩人、島田謹二先生	746
島田謹二先生 七回忌挨拶	761
精神の貴族、仙北谷晃一	766
批評家佐伯彰一氏を批評する	770
マイナーさん	775
鶴田欣也の生涯の旅	781
大きな海に戻った友よ——鶴田欣也氏のアニミズム	798

林連祥さまの思い出	800
助手だったころ	809

第十二部

平川祐弘

人について

若き日の平川君	813
付かず離れず六〇年、平川祐弘兄	817
フランス時代の平川君	822
マドリガルと平川先生	825
私の中の比較文学比較文化	831
国際化社会を生き延びるためのエリート育成法	841
平川先生を師に頂いて、とてもよかった	853
先生の魅力は「意気込み」と「親切」にある	859
私の見た平川祐弘	867
論文指導者としての平川祐弘先生	872
わが青春の『デカメロン』	877

作品について

887

「竹山先生」と「平川君」……………	足立節子	887
遠近図法で描かれた戦後精神史の試み……………	牛村 圭	893
ハーン、ニーチェと進化論的文脈……………	佐々木英昭	898
平川先生講演傍聴記……………	趙 怡	905
「ダンテの地獄」から始まる世界文学めぐりの旅……………	平石典子	913
日本への西欧世界像の最初の伝達		
——我が国における「リッチ」の運命……………	伊東俊太郎	918
『マッテオ・リッチ伝』解説……………	古田島洋介	924
『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク——中村正直と『西国立志編』』……………	戦 暁梅	929
明治日本を変えた思想の力……………	三浦小太郎	937
地理用語との関連で……………	荒川清秀	940
『日本の正論』『右顧左眄せず書く』に庄倒……………	井口優子	946
『日本人に生まれて、まあよかった』『日本語は生きのびるか』……………	鄭 大均	948
洋の東西を自在に涉猟した、膨大にして繊細なる知の橇円軌道の集大成…稲賀繁美		953
著作集版『開国の作法』に寄せて——忽然寺……………	平川祐弘	963
索引……………		